

どれみなのはなし

そのきゅうてんご



もくじ

まえがき

ちっちゃなくれんぼ…………… 3

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

今年もまた、年に一度の晰を書く季節がやってまいりました。「もっつと！」から数えて3回目の、あいちちゃん誕生日晰です。

なのに、『きゅつてんじ』。

情けない限りですが、いつも通り言い訳はなし。また、せめて愛情だけは減らさぬよう盛り込みました。わずかでもお楽しみいただけましたら幸いです。

それでは『どれみなはなし』そのきゅつてんじ。しばらくの間お付き合いくださいます。

酒処 金井亭亭主 猫好敬白

イラストレーション……久遠一海

ちっちゃなかくれんぼ

ほっ、ほっ、ほっ

みつつ出した息が、目の前でちよつとだけ白く丸うなつて消えてく。まだまだぬくいなあ。思ってたけど、もう冬が近いんやな。

金曜日の帰り、ちよい寒いげた箱の前。右手のかばんをよいこらしよ、つと置いて上履きしまつてんと、パンパンのかばんがつんつん、てつつかれてん。

「おーい、あいちゃーん。ホンマにパーティやらんでええのかあ？ 今ならまだまにあつて？」

リスみたいな丸メガネが、置いたかばんのほう見てる。同じクラスの咲ちゃんや。しゃがんで、あたしのかばんに呼びかけながら、また指でつんつん、て。「こあら！ そないつついたら、止め金はずれてまうやんか」

メガネが、キラリッて光つたような氣いしたんで、あたしは思わずかばん引つつかんで背中に隠した。

ちえ、なんて言いながら、あたし見上げてるわ。ふう。はつきちゃんたちで憤れてなかつたら、間に合わへんとこや。ほんま。

「も。誕生日になんの用意もせんと、プレゼント全部もろたりするからやんかあ。」

みんな、パーティで渡そう言つてたんやで？」「そない言つたかて、なあ。

「誕生日やいうても、こないもらえるなんて思わへんで、普通」

口とんがらかして、じとーつちゆう目えしてる咲ちゃん見てたら、思わず吹き出してしもた。んー

しゃあないか。

「それになあ、その あたし、ずっとお母ちゃんと離れてた、て言つたやろ？ 久しぶりに、いっしょの誕生日したいんや。かにんな」

咲ちゃん、ちよいあたしの目え見てたけど、息ひ

とっはいて立ち上がった。

「そっかぁ　ん。ほな、来年はばつとやるで。もういらん、ちゅうくらいにー!」

目の前で両手広げてん。はは　咲ちゃんのことやから、本当にやりかねへんな。

「そんなきは、よろしゅうな。ほな、あたし先帰るわ」
言ってる途中、男の子が目の端に入ったんで、あたしはちやつちやと靴はいて、かばん持った。

「え〜? もつちよつとくらしい」

重いかばんの止め金もつかい押してから、

「うしろ見てみい。田辺、待ってんで」

咲ちゃんが振り向いた先、カマキリみたいな男の子がこつち見てる。あたしただけやと絶対声かけて来いへんヤツやからなあ。あたしも気い使うわ。

「しゃあないなあ　ほな、来週なあ」

そのまま小走りで走ってく咲ちゃん見送って、あたしは校舎出ていった。あいかわらず、からかってええのか悪いのかわからんなあ、て思いながら。

「誕生日かぁ　」

学校出て、商店街に行く道歩いてるとき、あたしは思わず思うてること口に出してしもた。

ふくれたかばんの外側のポケット、手え突っ込んだらはがきがある。4枚の、パスディカードや。

みんな、来たがってたなあ。

今年の誕生日は金曜やから、そのまま泊まってこつなんて考えてたみたいやけど。

はづきちゃんは、テストが近いから、てみんなで止めたつたみたいやし。

どれみちゃんも、あたしン家に迷惑やて、お母ちゃんに怒られた言うてたな。

ももちゃんはカードと、あと手作りのお菓子、冷凍で送ってくれたな。　ちよつと早く着きすぎて、もうぜんぶ食べてもうたけど。

5 ちっちゃなかくれんぼ

最後まで粘ったんは、やっぱりおんぶちゃんやったなあ。金曜日の仕事から、そのまま飛行機で来るとか言つてたけど、土曜の朝に歌番組が入つてもうてああ、あんどきは電話口で泣きそうやったなあ。なだめんのに1時間もかかつて。あはははは、はははふう。

ま、ええわ。みんなこの空の下で元気にやつてんのや。また来年もあるんやし、今年はお母ちゃんと。それでええやんか。

あたしはバースデイカード、かばんに戻して、ジッパしめた。

来年まで、このまま持つとこか。

みんなのこと考えながら商店街の入り口まで歩つとつたら、いきなり目の前に影ができた。

なんやろ、思て見上げんと、美人のお姉さんが立ってん。和服なんやけど、町で見るようなんとちやう。これで髪の毛結うたら、まんま時代劇の町娘や。

「あ、あの〜?」

目の前に突つ立つたままあたし見てるんで、軽く声かけたら、いきなりあたしは肩に手え置かれた。

「しばらくぶりでおすなあ」

「いっ?」

「どないしましたたの?」

「な、なんやこのけつたいな言葉は!?」

「あたしが口開けんでいたら、お姉さんの顔がぎゅつ、と締まって、」

「本当にわからないようだな。では、これでどつだ」

着物のふところからなんか取り出して、あたしの目の前に、ずいっ、て押し出してきたわ。

「お面みたいなの、あれ? なんや、見覚えあるなあ。」

「このお面、あー!」

「ひよつとして、マジヨリードさんですか？」

顔上げて言つたら、お姉さんがにやつて笑つた。

「そうです。このあたり来たことある魔女は、うちしかおらへんよつて」

そついやマジヨリードさん、昔はこのへん来てた言つてたつけなあ。それにしても ああ、もう！どこのなまりか知らんけど！！

「どうでもええけど、その言葉やめてください！それやつたら、東京弁の方がよっぽど目立ちませんわー！」

ああ、思わずどなり気味に言つてもうた。ちろつと見上げたけど、マジヨリードさんちよつと考へてるだけや、別に気にしてないみたいやな。

「そつか。もう何百年も来ていなかつたからな」

そついう問題ちやうと思つんやけど まあええわ。

「そんで、あたしに何か用ですか？」

服のことも、きつと言つても無駄なんやろつなあ、思いながら、あたしは半分投げやりに聞いてみた。こ

れでくだらない理由やつたら、どないしたるか

「うむ。それがな」

なんや？ あゝに指あてて。えらい言いにくそつやな。

「それが 女王様が、逃げ出した」

え!?

あたしは一瞬、目の前真っ白になつてもうた。いまの女王さま、ちちゆうと

「ハナちゃんが逃げたやて!？」

「おととつ」

家に帰つて部屋にかばん放り込んでたら、足がなんか引つかかつた。

なんやろ、て見てみたら ああ、ふとん出しつ

ぱなしやないか。今朝のあたし、なに焦つとつたんやろなあ。

7 ちっちゃなかくれんぼ

「さあて、どないしょか」

マジヨリードさん待つとるし、もうじき夕方やし
うん。

あたしはちやつちやと着替えてから、商店街むかつて走り出した。とりあえず、寝るまでふとんは見なかつたことにしよ。

商店街の入り口、待つたマジヨリードさんに手え振つたら、なんやジロジロあたし見ながら近づいて来てん。なんやろ、思てたらそばに来るなり、

「その服は、汚れてもいいものか？」

はあ？

「え、ええ。そら普段着やから、別にかましませんけど。？」

まだじーっと見てたけど、ひとつうなづいて、
「そうか。それならいいんだが」

よお見ると、マジヨリードさんの着物、ほこりがいっぱいいついてるわ。ちゅうことは、汚いところでも行くんかいな？

考えとつたら、そのままあたしに背中向けて歩きだしてん。あたしは急いであと追いかけてつた。

マジヨリードさんについてしばらく歩いてく。

最初は、商店街まっすぐ歩いとつたんやけど、途中でひよい、つと脇の小道に入つて。あとは細い道をひよいひよい、つと なんかちゅうか、この町にこんなところあつたんか、ちゅうところ通つてたら、いきなり前が開けた。

ああ、ここむかしは街道やつた、ちゅう道や。今は大きな道できてもつて、あんま通らへんとこやな。

「ここだ」

うおつとつと いきなり止まるから、ぶつかり
そうになつてもうたやんか。

ええと、ここやて？ はあ、大きな家やなあ け

どかなり古いわ。こら、汚れるつちゆうより、倒れるほう心配せんとあかんのやないかあ？

「心配ない。魔法がかかっているからな。古くても壊れたりはしない」

あたしはびつくりして見上げてしもた。あいかわらずむすーっとした顔やけど、元老院いうんはダメやないんやな。

それにしても、なんで中入らへんのやろ？ 屋根のほうじーっと見てるけど

「ここはな、魔法堂になるはずだった家だ」

へ？

いきなりやったから、あたしは目えパチクリしてもうた。

「私が日本に残っていたなら、な

いや、くだらぬ話だ。すまない」

頭ふつてそのまま家に入ってたけど、あたしはそのままは少しだけ、家の上のほう見てた。

古いかわら屋根に、「MAHO堂」の看板が見えるような気がしたんや。

*** **

家に入ると、マジヨードさんはすぐ奥の方に歩いてった。

覚悟はしてたけど、やっぱほこりだらけやな。

「これだけは、どうにもな。さあ、ここだ」

目の前に、これだけ洋風のとびらがあつた。MAHO堂にあつたんとおんなじや。

「開けるぞ」

マジヨードさん見て、あたしはうなずいた。とびらが音たてて開いてって

「ん ん？」

てつきり、魔女界につながってる思たんに、見えたんは普通のろうかやった。

せやけど、なんや見覚えあんなあ

ありや？ 妙

9 ちっちゃなかくれんぼ

に見慣れたもんもあるし。まあるいもんが、ぴよこ
ぴよこ って!?

「あああああつツ!!」

ぴよこぴよこ動いとつた丸いだんごが、ひよいつ
と遠くに下がった。

「いったいなあ、もう。そんな大声ださなくてもい
いじゃん!」

ほこり払いながら立ち上がってきたんは ああ、
間違いないわ。

「どれみちゃんやないか!」

「そうだよ。こっちはMAHO堂なんだけど、あい
ちゃん魔女界にいるの?」

ぜんぜん変わってへんなあ。まあ、まえ会ってから
数ヶ月やけどな。

「そうやない。マジヨリードさんが、むかし大阪に
作つたMAHO堂や」

あはは。目えまんまるにしとるわ。そろそろやるな。
「そっかあ ぶわっ!」

いきなりどれみちゃん吹っ飛ばされて、丸いメガ
ネがせまってきた。

「あいちゃん! ハナちゃんは!」

ありや。先に訊かれてしもた。あたしは頭ふつて、
「 っちゆうことは、そっちも行ってへんのかあ」

ああ、はづきちゃんが肩おしてもうた。

ん〜弱つたわ。ハナちゃんなら、きつとどれみちゃ
んとこやと思たんやけどなあ。そやけど、

「だいたい、なんでハナちゃん逃げ出したんやろなあ」

あたしが言つたら、はづきちゃんがばつと顔上げ
た。えっ? ちゆう顔や。

「それは ー」

なんやろ、思たけど、

「またマジヨリ力が余計なこと言つたんかな?」

そのとたん、目の前が真っ黒になった。

「わしがそんなことするかあっ!」
うわっ! いたんかい。

「こっち来ようとしてるんを、どれみちゃんたちが引き戻してるわ。」

「今回はマジヨリカのせいじゃないみたいよ」

「うん。今回はね」

背中ではマジヨリードさんがため息ついてるわ。

「お、お前ら」

マジヨリカの肩で、ララがけらけら笑ってるし。

「っていうかさあ、逃げたのきょうってことは、理由は決まってるんじゃないん」

マジヨリカ背中でおさえながら、どれみちゃんが言うてる。ん。それは考えたんやけど

「あたし、かあ？」

向こうのMAHO堂で、マジヨリカ以外みんなうなずいてる。けど、なんか引つかかるんや。なんであたしなんやろ？

「こちらの可能性が高い、ということか？」

あたしの横から、マジヨリードさんが顔出した。とびらの向こうのどれみちゃん、ちょい首かしげてん。

「でもハナちゃん、大阪のあいちゃんの家、わからないんじゃないかなあ？」

「それは」

ん？マジヨリカとマジヨリードさんが、顔見合わせで言いにくそうにしてんなあ。

「実はな、先代の女王様が、お前たちの引越し後の地図を描き置いていたんじゃないや。道順つきでな」

先代つちゆうと ああ、ゆき先生か。あの人、天然やからな。やつても不思議じゃないかあ。

「それじゃ、とりあえず家までの道、探そつか？」

どれみちゃんが、くたびれたような声で言った。そやな。がつくりしてる場合やないわ。

「そうね。じゃああいちゃん、またあとでね」

「ん。じゃ、またなあ」

言うて、とびら閉めようとしたら、はづきちゃんが振り返った。どれみちゃんも、「ケながらこっち戻ってきてん。」

「ど、どないしたん？」

あたしが驚いてたら、ふたりでちよいと顔見合わせから、

「ハッピーバースデー、あいちゃん♡」

どれみちゃんたちが、笑いながらハモってる。

背中向けたマジヨリカが、手だけひらひら振ってる。その上で、ララが笑ってる。

とびらが閉まつてから、あたしの両肩に手が乗ってきた。マジヨリドさん、口元だけ笑ってる。

「お前は、恵まれてるな」

あたしは、思っきりうなずいた。絶対自信あんな、これだけは。

マジヨリドさんといっしょに、家まで戻ってみよ言つてたあたしの背中に、声が聞こえた。

「お待ちなさい」

後ろ向いたら、とびらが光ってる。なんやる思ってる、勝手にとびらが開いた。

とびらの向こうは、明るうて広い場所。白い階段の上に、豪華なイスがある。って、これ、女王様に会うとこやないか!?

「先代女王様!」

マジヨリドさんが、となりでひざついた。あたしもそうせなあかんなあ、思ったけど、とびらの向こう見てて、その気うせてもた。

女王様、メガネに白衣のまんま立ってるんやから。

「ええと、女王様? なにやって」

「あいちゃん、私はもう女王ではありません。ゆきでよいのですよ。」

マジヨリド、あなたも立ってください」

となりで立ち上がるん見てから、あたしは一呼吸して、

「はあ。ほな、ゆき先生。そこでなにやってんですか?」

ああ、ゆき先生の顔が、女王様の顔になったわ。

「ハナちゃんの方を探していたのですが」

「こら、えらいことになったんかな？」

「行き先ってねえ、アメリカかもしれないの」

あたしは思わず壁に手えついてもた。い、いきなりゆき先生にならんでも ああ、もう！

「ええですから、ゆき先生が女王様が、しゃべり方どっちかにしてください！ ややこしゅうてかないませんわ!!」

「あ、やつぱり？ じゃあ、こつちにしておくわね。さつき来てから、ずくと調べてるんだけどね。こつちから開けた扉って、実は3つしかないみたいなのよあ」

あ、あたま痛いわ。なんや、この軽いしゃべくりは。「で、その扉、っていうのがね、美空町と大阪と、あとアメリカのももちゃんのとこにあるMAHO堂なわけ。だからねえ、ひよっとするとそつちかもしれないのよ」

女王様や思うからあかんのや。これはゆき先生、ゆ

き先生、ゆき先生 よっしや。

「これから、その扉をアメリカのMAHO堂につなげるから、ちよつと見てくれない？」

あたしは、わかりました言いながら、急いでとびら閉めた。

ふう、ため息が、マジヨリードさんと重なってもた。続けて、咳払いも聞こえてきてん。 まあ、まじめな人やし、な。

すぐとびら開けようとしたけど、ノブが回らへん。「今は満月に近くないからな。女王様ほどの魔力がないと、扉は開かないのだ」

はあ、そついうもんなんかあ。ほな、待つしかないなあ。

キイ

しばらくして、勝手にとびらがちよい開いた。マジヨリードさんが開けようとしたら、

「まあまあ。今度はリードなの？」

聞かえてきたのは、覚えのあるの〜んびり声、って

「リリカおばあちゃん!？」

「まあ、あいちゃんまで。久しぶりねえ」

あいか変わらず、マイペースな人やなあ。そやけど、

たしかゆき先生、アメリカつなぐて

「リリカ、いつの間にアメリカに行ったんだ？」

あたしの頭の上から、マジヨリードさんが言った。

ほっぺたぴくぴくしてんわ。

「なに言ってるの、リード。ここは伊豆の、わたしのペンションよ」

いいっ!？」

さっきマジヨリードさん、普通やったら

とびら開かへんて言つてなかつたか？

「リリカ　また魔力まかせにこじ開けたな？」

「やあねえ。そんな、人を化け物みたいに。」

あ、そうそう。ハナちゃんなら来ていないわよ」

ははは。なんや知らんけど、リリカおばあちゃんて、えらい人やったんやなあ。マジヨリードさん、びつとるやんか。

「と、とにかく、女王様は伊豆のほうに行つてないのだな？ わかった。なら、少なくとも今日は扉を

閉めてくれ」

「もう〜？　せつかくあいちゃんとも会えたのにい」

「これ以上ややこしくするな！　し・め・ろ!!」

怒鳴り声に思わず耳ふさいでもうたけど、リリカ

おばあちゃんはいいかかわらずにこにこ笑てるわ。

「まあ、怖いわねえ。　それじゃあいちゃん、ま

たね」

とびらがパタン、て閉まっても、となりから殺気がしてん。そ〜と見上げてみたら　うあ、マジヨ

リードさん、どえらい顔でとびらにらんでんわ。

「　ふう。私は、あいこの家まで歩きがてら探す

としよう。あいこはここで、情報を集めてくれ」

ああ、一気に疲れた顔になつてもうたなあ。やつ

ぱり

「リリカおはあちゃんて ふもっ!？」

言いかけたとこで、リードさんに口ふさがれてもた。

「リリカのことほもう言わないでくれ。今日いっばいは。頼むから」

なんちゅうか この人も苦勞してんやなあ。

マジヨリードさんがこの家を出てつてから、どんくらいたつたんやろ。まだ夕日があるから、そない遅くはなつてへん思うけど

あん？ なんか、いつの間にかとびらが開いてるやん。また別の場所とつながったみたいやな。

まわりの色がこつちとちやうなあ 電灯のあかりやるか？ むこう、夜なんかな？

「Yoohoo!!」

うあ！ 開いたとびらに近づいたら、声だけ聞こえてきたわ。今度はなんや!？」

「あハハ、ひさしぶりイ。あいチャン、元気？」

ん？ ああ、この声。

「も、ももちゃんかあ!？」

「そう。マジヨモンローのいたMAHO堂だヨ。あいチャンのトコ、MAHO堂じゃないネ？」

はあ。たしかに、よう見てみたら美空町のより洋風の作りや。作った場所で、雰囲気変わるんやな。

「ここは大阪や。マジヨリードさんが、むかしMAHO堂にしようとしてた家やねん」

クスクス、つちゅう、ももちゃんらしい気持ちええ笑いが響いた。

「へえ。じゃア、和風のMAHO堂ができた力もしれないんだネ」

けど、さつきつから、姿が見えへんなあ。

「なあ、ももちゃん。なんで声だけなん？」

「ん？ まあ、いいじゃナ ふ、ふああ」

うあ、ねむそうな声や。

「ももちゃん、そっち何時なんや?」

「ん、もうちよつとで夜中の0時イ」

あつちやあ。そないに時差あるんか。しもたなあ。

「遅いんやったら、もう寝えな」

「や、だヨ」

またそつやつて意地張るんやからなあ。

「ええから寝え! これでももちゃん病気になつたら、あたしがたまらんわ」

「でも、も、チヨつとだから あ!」

ポーンポーン

ももちゃんの後ろにあつた柱時計が鳴つた。なんやろ、なつかしいつちゆうか あつたかい音やなあ。

「Happy Birthday あいちゃん」

あつたかい時計の音に、ももちゃんの声が重なつてきた。

それといつしよに、とびらの脇から、そあつとケー

キが出てきてん。

「へへへ。あいちゃんとながルって、ユキ先生に聞いたから、急いで作つたんダヨ。やつぱり作りたてがイチバンだもんネ!」

そら嬉しいけど、ケーキだけつちゆうのは

「ももちゃん、なんで顔見せへんの?」

「」

ありや? いきなり黙つてしもた。なんなんや??

「おい、ももちゃんあゝん」

返事があらへん。

「なんかあつたんか? そやつたら、あたしがそつち行つて」

「来ちゃダメ!!」

うあつ! び、びつくりした。えらい大声や。

「ごめんネ。でも、顔見タラ、そっち 日本に戻りたくなつちやうヨ」。

だから、これだけ。ネ?」

ふう よっし。

「うん、ちよいと取れへんなあ。悪いけど、もうちょっと押し出してくれへん？」

声を明るうして言うてみたら、ももちゃんもほっと息はいたわ。

「そうなの？ じゃ、よい」

そう言いながら、ケーキといっしょにすーっと手え伸びてきた。ほな、せえ、のっ！

「うあひゃ!？」

つつかまえたっ♡ そあれっ!!

「え？ ナニ？ なにナニ??？」

バンッ！

「ぶわっ!!」

あ、あっちゃあ。ももちゃん、顔かべにぶつけてもった。

「い いはいヨ、あいひゃ〜ん」

あ、あはは。やっと顔見せてくれたももちゃん、鼻

のあたま押さえてもってるわ。

「ごめんごめん。 せやけど、みずくさいこと言うからやで？」

来たくなったらいつでも来たらええやん。それで困るんやったら、あたしも一緒になんとかしたるわな?。」

うんうん、てももちゃんうなずいてる。よっしや。

「ほな、これはしまいやな。で、ハナちゃんなんやけど はなし、聞いてるかあ?。」

目のあたりタオルで拭いてたももちゃんが、ぱっと顔上げた。

「うん。さっき、どれみチャンたちとつながって聞いたヨ。でも こつちには来てナイ。

ワタシ、きようはず〜っとMAHO堂にいたカラ」

そっかあ あ、ありや? とびらのところが、波みたいにゆらゆらしてんで?。」

「な、なんや!？」

あわててももちゃん見たけど、平気な顔で笑てるわ。

「ああ、別の場所とつながっちゃうんだヨ。さっきもそうだったカラ。」

それじゃ、あらためて Happy Birthday あいちゃん」

ゆらゆら姿が消えてっても、ももちゃんの笑顔、しばらく残ってた。

「あ。あいちゃん♡」

ももちゃんが消えたどびらの波がおさまったと思たら、目の前によく知ってる顔があった。変装用のサングラス、頭にはね上げたまんまの

「おんぶちゃんやないか。お仕事、もう終わったんか?」

「もつちろん どれみちゃんから連絡があったからお仕事からまっすぐMAHO堂に来たの」

まわりには誰もおらんみたいや。みんなも、まだ

探してるんやな。

「そっかあ 情けないけど、こっちもまだハナちゃん見つかってへんのや。もう、あとどこ探したらええんやろ」

あたしは頭かいて、下むいてしもた。あゝあ。おんぶちゃんにまで、心配かけとうなかつたんやけどなあ。

「そんなことで弱音はくなんて、あいちゃんらしくないわよ。ひとつひとつ考えていったらどつ?」

ひとつひとつ、かあ。うん。

あたしがうなずくと、おんぶちゃん、右手の指を一本立てたわ。

「ハナちゃんがかにかしてるなら、きっとわたしたちにもわかる理由があるはずよね?」

そらそうや。ハナちゃんが、そないな変なことするわけがあらへん。変に見えるんやったら、なんか訳があるはずや。

「ねえ、あいちゃん。何か変なことって、ない?」

考えとつたあたしに顔近づけて、おんぷちゃんが
あたしの目え覗き込んでるわ。ん、

「変、つちゆうたら　そもそも、なんであたしだ
けなんやろな？」

「そうよね。あいちゃんも、だったら不思議じゃな
いんだけど、どれみちゃんときは会いに来てない
んだもの。変よね」

せや。あたしも最初からそう思ってた。他になんや
あるんやないか、って。

「それでね、ララに聞いてみたのよ。最近、なんで
もいから変わったことがなかったか、って。そし
たら　」

そこで一呼吸してん。なんや？　えらいもったいつ
けんなあ。

「そしたら？」

あたしの顔みて、もつ一呼吸してから、

「ミミの元気がないんだって」

「ミミ？」

あ！

「ふふふ。さすがあいちゃん。わかったみたいね。
それじゃ　はい、これ」

あたしの手のにぎらせてくれたんは、うすい青の
ろうそく。数えんでも、5本に決まってるわ。

「さあ、早く　きゃー！」

あたしは、思わずおんぷちゃんに抱きついて、ぎ
ゅーっとしたった。

「ほら。わたしとは、またこうできるんだから。ね」
言いながら、おんぷちゃん、あたしの背中なでて
くれてん。

あたしは、もっかいだけぎゅっ、としてから、もも
ちゃんのケーキ抱えた。

あたしのろうそく13本と、おんぷちゃんからもろ
た　ミミのろうそく5本立てて。

「おおきに、おんぷちゃん。ほな、行ってくんで」
言ったら、おんぷちゃん笑って親指立ててくれた。

「ん。ハッピー・バースデー！　がんばって!!」

「ただいまあ」

ももちゃんの手洗い桶さんように歩いてきたんで、ちよい遅くなってもうたな。

あたしは台所のお母ちゃんのように、そーっとと抜けて、部屋のドア開けた。

「ハナちゃん？」

部屋に入って、外に響かんようにそおつと呼んだんやけど、なんも聞こえへん。

「いるんやったら、出てきてや」

勉強机にキーキ乗せながら、もっかい呼びかけたけど、やつぱ、なんもこたえ帰って来いへん。昼に帰ってきたときやつたら、ここであきらめてたやるな。

せやけど、いまはちゃう。ここにある、てわかっとなるんや。

部屋のすみ、ぼこぼこ盛り上がってる、たたみ忘

れたふとん。 いんや、あたしはちゃんとたたんだはずや。

あたしは、そーつとふとんのそばまで寄りてみた。ホンの少しやけど、上下に動いてる。

「みつけ たっ！」

ぱっ、とめくつたふとんの下で、ちっちゃな子供が寝とん。 もっとちっちゃな妖精、右手でなでながら。

「ハナ女王さまは見つかつたようだな。ご苦労」

ハナちゃん両手で抱き上げたちようどそのとき、窓のほうから声がした。

着物姿で、無表情な顔の マジヨードさんや。あたしがの腕の中から、ハナちゃん右手で軽う抱え上げて、

「ふむ？ 他にも、なにかいるのか？」

あ。

「いんや、なんもおれへん　ですよ」

あたしは、とっさにそう言つてもうた。めくれたふとん、足が勝手に直してゐる。

「そうか」

心の中で冷や汗かいたとつたら、マジヨリードさん、

ゴホ、ゴホ、って、妙な咳して、

「ああ、そうそう。あの扉だかな」

とびら、って　あの、大阪のMAHO堂のことやろか。なんでいきなり　？

「少し壊れてしまったようだな。あと三日ほどは、小さなものなら通れてしまつたらう。玄關のカギをあずけておくから、悪いが戸締りしておいてくれないか？」

言いながら、あたしの手に銀色のカギ押し込んだ。美空町のMAHO堂と同じもようのカギや。

「ああ、魔女界に戻ったら注意せねばならんな。

特に、妖精には、な」

ちろっ、と、あたしの後ろ見てから、マジヨリー

ドさん、窓の向こうに消えてった。

最後にウイंकしたように見えたんは、あたしの気のせいやない。きつと。

あたしは、ふとんのそば寄つて、そつと声かけた。

「ま、ゆっくり寝てってや。ミミ」

—おしまい—

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭
発行日 2003年11月2日